と題して、

「春の鳥」は余が佐伯当時、事実、ある少年を描けるものなり。現に今も活きて居れりと聞く。

その少年と云ふは、金箔付の自痴にて、奈何に除発も、誘導し、教育するも、殆ど義の観念なし。当時の余は甚しき空想家なりしを以て、慥に教育し得るものと信じて疑ふ所なかりき。脳組織中の或一部に障害ありて、全機能の作用に障害を及ぼすものなるを以て、其れを除き去らば、自然の霊知は閃光の如く湧立つに相違なかるべしと信じて、亦疑ふ所なかりき。故にあらゆる方法を試みて教えつ賺しすかす時には叱りつけてまで、泣くが如き思にて教育せり。然れども遂に教育の効果を見ること能はざりし時は、余と雖も自然を疑はざるを得ざりき」

とある。独歩がこの可憐な少年の為にどれ程ど努力したかを知らされる。

また、独歩の書いた評論の中に、「予が作品と事実」と心う文章がある。それに「春の鳥」と題して、

「此一編の主人公、自痴の少年は、余が豊後佐伯町に在りし時親しく接近した実在人物で、此少年の身の上話は皆な事実である。しかして此少年が城山で悲惨な最後を遂げた事は余の想である。余は此少年を非常に気の毒に思ひ、自ら進んで其教育に従事して見た事もある。数の観念が全く欠けて居るので如何にもして此欠陥の幾分なりとも補ひくれんと種々の手段を採った事も多い。けれども此等は悉く徒労に帰した。そこで余は当時自痴者に就き深い同情と興味を持ち常にこれを念頭に置いて居た。

此少年の事を思ふて、人間と鳥獣の差別、生物と宇宙の関係など、随分城山の上で空想に耽ったものである。そして此一編が七八年の後に出来たものである。」

と書いてある。この少年に対する独歩の深い同情心から、「春の鳥」という名作が生まれたのである。

最後に「回顧」は甚だこれを感じぬ」とある。この「回顧」は独歩自身の仮称で良ないかと思われる。「愛の半生」「愛日記」と題する作品があり、自分自身のことを書いてある。

坂本老人とは、坂本永年氏のことである。（つづく）

紹介

国木田独歩の自然探訪

佐伯独歩会報 第二号より
（宇佐高長 岩城 京氏稿）

独歩は佐伯着任のその日から、城山（三四）を仰ぎ始めとし、城山周辺を次々と歩き、女島・津志河内・下堅田・切畑と足を伸ばし、ほとんど日曜日には佐伯の山野を歩きつくしている。そして弁当をもって次のような遠足登山を試みている。

○天開山　佐伯に来て一週間後の十月八日に早速登り、十一月十八日夜山夜に一泊、翌十九日には鎖峠・虎岳とめぐって帰る。

○鉄砲岳（二九六）十月二十二日と翌二十七年五月六日

○元越山（二四九）十月五日と翌年四月二十二日

○猿戸・南代峠　十二月四日　小説「鹿狩」の一行に加わり

○梅谷社山　二十七年二月四日

○大入島　二月二十五日

○切畑梶原の奥　軍神大石　三月十一日

○青山　長沢　四月一日　東光庵の桜「桜はすでに散りいたれ」

さてもさても、ちょっと真似出来そうもない。（羽）